

不可能な証言と脱主体化  
—J. M. Coetzee の *Foe* (1986) における主体の場の探究—

金内 亮

**要旨**

本論では J. M. Coetzee (1940-) の *Foe* (1986) を、言葉を持たない他者を語ろうとする者の主体の場に注目しながら分析する。このようにして、本作において他者を語る可能性がどのように描かれているのかを分析する。第一節では、Susan Barton が島での出来事を真実の言葉でもって語ろうと試み、失敗する様子を確認する。その後、第一節で行った分析をもとにして、第二節において他者を語ろうとする Susan が経験する幽霊化を分析する。そして、このような幽霊的な主体の場においてこそ証言する可能性が開かれるのであるということを確認する。その後、*Foe* において描かれていたこの幽霊的な主体の場と、ジョルジョ・アガンベン (1942-) が『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』(邦訳 2001) で分析した証言の主体の場とを比較検討する。このような手続きによって、従来の研究ではほとんど触れられてこなかった、*Foe* で描かれている幽霊的な主体の場の意義を明らかにすることを目指す。そして、そのようなテーマが以降の Coetzee 作品と深く関わっていることを明らかにする。

**キーワード** : J. M. Coetzee, *Foe*, ジョルジョ・アガンベン, 証言

**1. 言葉を持たない他者を語ろうとする試み**

本論は、J. M. Coetzee (1940-) の *Foe* (1986) を、言葉を持たない他者を語ろうとする Susan Barton の主体の場に注目することで読み返すことを目指す。本節では、*Foe* において Susan が島での出来事を証言しようとし、言葉を持たない他者について語ろうと試み、失敗していく過程を分析する。

誘拐された娘を探す旅の途中、Susan は船の乗組員らによる反乱に巻き込まれて海に流され、Robinson Crusoe と Friday が暮らしている島へと流れ着く。Crusoe は自分の身の上話を Susan にするが、彼女の判断に従えばその話の真偽はさっぱりわからない(*Foe* 12)。Crusoe は島での記録を全く残していなかったのだ。島での彼の主な仕事といえば、Friday と共に石を集めて段々畑を作ることである。彼女は島での記録を残すことの重要性を説こうとするが、Crusoe は全く取り合わない。彼は Susan に次のように言う。“I ask you to

remember, not every man who bears the mark of the castaway is a castaway at heart” (33). この言葉を Susan は理解しないが、ここで Cruso は、記録や物語の恣意性を指摘しているのだ。しかし、Susan は物語を残すことの価値を信じて疑わない。彼女は次のように考える。

Let it not by any means come to pass that Cruso is saved, I reflected to myself; for the world expects stories from its adventurers, better stories than tallies of how many stones they moved in fifteen years, and from where, and to where; Cruso rescued will be a deep disappointment to the world; the idea of a Cruso on his island is a better thing than the true Cruso tight-lipped and sullen in an alien England. (34-35)

彼女は Cruso の物語を搾取しようとしていると言える。そこにおいて現実の Cruso は重要ではない。また、彼女は島での Cruso についての物語を世に広めることによって有名になり、それで金を稼ぐことができると考えていた (58)。このような態度は Susan や Friday を救出してイギリスへと送った Smith 船長も共有している (このイギリスへの帰航中、Cruso は命を落とす)。彼は島での出来事を本に書いて出版すべきだと Susan にすすめるが、彼女は “A liveliness is lost in the writing down which must be supplied by art, and I have no art” と言って自らの文才の無さを嘆く (40)。そこで Smith は作家を雇って代筆してもらうことを提案するのだが、彼女は “I will not have any lies told” と述べ (40)、“I would rather be the author of my own story than have lies told about me” と主張する (40)。そして彼女は次のように言う。“If I cannot come forward, as author, and swear to the truth of my tale, what will be the worth of it?” (40)。このように、島での物語に対する彼女の思いは複雑である。一方では、Cruso の物語を歪めて世界が欲している物語を創作しようとし、もう一方では、島での本当の物語を証人として残そうとしている。しかし、もはや言葉を持たない他者となってしまった Cruso の真実の物語を残そうとすることなど不可能であり、彼女はそのことを認識している。彼女は次のように述べる。“Who but Cruso, who is no more, could truly tell you Cruso’s story?” (51)。だが、Cruso もまた、島での出来事の真の証人ではありえない。上述したように、彼は島での出来事について述べようとしな。更に、Cruso は Friday の舌を切り取ったのは奴隷商人であると語るが (23)、Susan は Cruso が切り取ったのではないかと疑う (68-69, 84)。加えて、彼女は Cruso が島での生活に飽き飽きしていたために島に現れる人食い人種の話を作り上げたのではないかと疑っている (82)。だが、その Cruso も今となっては語るができない。証言するというこのアポリアがここにある。しかし、不可能ではあっても、Cruso は息絶え、そして Friday は舌を持たず言葉を扱うこともできないため、Susan しか証言することはできない。しかし、先に見たように、彼女は文才の無さがその不可能性の原因の一つであると考えて

いる。故に、彼女は第二、三章において作家である Foe に代筆してもらおうとするのだ。

しかし、第二章において彼女は Foe に出会うことができない。彼女は手紙を書き続けることで Foe に頼ろうとしながらも、自ら島での物語を書き記そうと試みる。その過程で、彼女は自らの物語が読者の興味を引かなくてはならないと考えるようになる。彼女の物語が誰にも読まれなかったとしたら、島での物語を残そうとする彼女の試みそのものが失敗してしまうことになるだろう。そのような考察の結果、彼女は自らの物語が退屈であるという結論に至る (88)。島での出来事はほとんど退屈なものであったので、そのような事実を物語に残す価値について彼女は確信を抱くことができなくなってしまう。そのような退屈な物語は読者の興味を引かないだろう。ならば、島での物語を残す意味とは何か。読者の好奇心を意識することは、島での物語に事実ではないことを盛り込むことに繋がる。このようにして、Susan は Cruso や Friday といった言葉を持たない他者を裏切る行為へと歩を進めることになるのだ。しかし、彼女は「奇妙な話など持ち出さずに」島での出来事を語ることを望むようになる (67)。では、物語を面白くすることと、証言を残すということとはどのようにして両立させられるのだろうか。Susan にとっては、それを両立させられるのが作家なのであり、Foe なのであるが、その期待は裏切られることになる。

第三章において Susan は Foe と出会う。以降、島での物語や Friday の物語に対してどのような態度を取るかについて、彼らの間で論争が続くことになる。先にも見たように、Susan は作家である Foe ならば彼女が抱えている問題を解決してくれると考えていたわけだが、実際はそうではなかった。Foe は Susan の島での物語をより大きな物語の中に置くことで、そこに生命を吹き込もうと試みるのである。彼は彼女に、彼女が過去に滞在していた Bahia について訊ねる。彼女はその質問を島での物語にとって関係がないと撥ね付けるが、彼は次のように言う。“How do you live all this time? How do you clothe yourself? Where do you sleep? How do you pass the days? Who are your friends? There are questions that are asked, which we must answer” (116). つまり、Foe もまた読者を意識しているのである。そして Foe は次のように述べるのである。“The island is not a story in itself... We can bring it to life only by setting it within a larger story” (117). Foe は「より大きな物語」について説明するが、Susan はそれを聞いて愕然とする。なぜなら、その設定には Foe による仮説が込められているし (117)、彼女が Foe に代筆させることで知ってもらいたいと願っている物語は島での物語だからである (121)。加えて、それ以前に Foe は島での物語に人食い人種や海賊の侵入事件を挿入しようと述べているが、Susan は “These I would not accept because they were not the truth” と述べて断固反対する<sup>2</sup>(121)。Foe は Susan の物語に事実でないエピソードを盛り込んだり、島の外を含むより大きな物語の中に置いたりしようと試みるが、それらは島での出来事の真実についての物語を望む Susan によって拒否されるのである。

彼らのこのような議論は、言葉を持たない Friday をいかに語るのかという点において最も濃密なものとなる。Susan は Friday について次のように言う。“The story of Friday’s tongue is a story unable to be told, or unable to be told by me. That is to say, many stories can be told of Friday’s tongue, but the true story is buried within Friday, who is mute. The true story will not be heard till by art we have found a means of giving voice to Friday” (118). Friday についての彼女の発言では、次のものが最も重要だろう。

Friday has no command of words and therefore no defence against being re-shaped day by day in conformity with the desires of others. I say he is a cannibal and he becomes a cannibal; I say he is a laundryman and he becomes a laundryman. What is the truth of Friday? You [Foe] will respond: he is neither cannibal nor laundryman, these are mere names, they do not touch his essence, he is a substantial body, he is himself, Friday is Friday. But that is not so. No matter what he is to himself (is he anything to himself? — how can he tell us?), what he is to the world is what I make of him. Therefore the silence of Friday is a helpless silence. He is the child of his silence, a child unborn, a child waiting to be born that cannot be born. (121-122)

言葉を持たない Friday について語ろうとしても、その物語は恣意的なものでしかありえない。そして Friday にはその恣意性に反抗する手だてすら持たないので、その恣意的な物語はそのまま Friday についての物語であるということになってしまう<sup>3</sup>。故に、Friday の真実の物語を語ろうとする試みは、言葉を持たない Friday に言葉を与えるという方法でしか実現されえないと彼女は考えているのだ。Foe は、Friday の沈黙に対して異なる立場を取る。彼は次のように言う。

Though you say you are the ass and Friday the rider, you may be sure that if Friday had his tongue back he would claim the contrary. We deplore the barbarism of whoever maimed him, yet have we, his later masters, not reason to be secretly grateful? For as long as he is dumb we can tell ourselves his desires are dark to us, and continue to use him as we wish. (148)

彼は彼で、Friday に対して語られる物語が恣意的なものであらざるをえないことを認識しているのだ。しかし、そのような視点の上に立ち、彼は Friday を自分の物語の枠内に自由に押し込むことができるという状況を都合良く利用しようと考えているのだ。そして彼は、Friday の沈黙について次のように述べる。“In every story there is a silence, some sight concealed, some word unspoken, I believe. Till we have spoken the unspoken we have not come to the heart of the story” (141). つまり、彼は自分の物語でもって Friday の沈黙につい

て代わりに語ろうとするのである。しかし、彼は島での物語や Friday の物語を書き上げられない。そのような彼を見て Susan は次のように思う。

And might not Foe be a kind of captive too? I had thought him dilatory. But might the truth not be instead that he had laboured all these months to move a rock so heavy no man alive could budge it; that the pages I saw issuing from his pen were not idle tales of courtesans and grenadiers, as I supposed, but the same story over and over, in version after version, stillborn every time: the story of the island, as lifeless from his hand as from mine? (151)

彼女が Foe に対して抱いていた願いはここに潰えることとなる。彼女は、作家である Foe ならば島での物語や Friday の物語を、嘘やより大きな設定を込めることなく、同時に読者の興味を引きながら語ることができるだろうと考えていた。しかし、それは作家にとっても不可能な試みであったのだ。彼女は Foe に次のように述べる。“It is not whoring to entertain other people’s stories and return them to the world better dressed. If there were not authors to perform such an office, the world would be all the poorer. Am I to damn you as a whore for welcoming me and embracing me and receiving my story?” (151-152). このようにして彼女は、Foe がこれまで嘘で彩りながら他者の物語を語ってきたことを受け入れるようになる<sup>4</sup>。このように、Foe という作品では、言葉を持たない他者を語ることの不可能性が描かれていると読むことができる。

また、別の観点からも Friday の物語が語られない様子を観察することができる。“We must make Friday’s silence speak” という Foe の発言のもと (142)、彼らは Friday に英語を教えようと試みることとなる。彼らは Friday に読み書きを教えようとするが、教育は失敗に終わり、Susan はそれを耐えがたく感じる。第三章最終部において、Friday はアルファベットの o に見えなくもない記号を書き連ねる。それを見て Foe は次のように言う。“It is a beginning . . . Tomorrow you must teach him a” (152). しかし、ここで Friday が書いているものがアルファベットである保証はどこにも無い。Susan が Friday に “hous” という語を教えていたとき、Friday が書くものは彼女が教えた通りのものかどうか定かではなかったし (145-146)、Friday はそれ以前に目のような模様を書き連ねていたので、o に見える文字は実はその模様の一種であるかもしれないのだ。そして Gayatri Chakravorty Spivak が指摘しているように、例えそれが o であったとしても、それが意味するものは omega、すなわち終わりであるかもしれないのだ (Spivak 189)。

ここまで見てきたように、Friday は物語に取り込まれること、そして言葉を教え込まれること、すなわち彼を理性的な言説の枠内に閉じ込めようとする試みからすり抜け続ける存在として描かれているのである。では、彼を書くことは不可能なのか。彼を語ろうとする試みは不可避免的に失敗するのであろうか。Spivak は、Foe を学生に教えるに際

して、この作品を「周縁を取り込もうとする Defoe の想像力を修正するものとして」「隠された臨界点に与えられた恣意的な名である Friday の手前で立ち止まるために」用いることができると述べている (Spivak 193)。前者についてはここまで分析してきた通りである。以降私は、Coetzee が描く作家 (*Foe* においては Susan) が Cruso や Friday という言葉を持たない他者を目の前にしていかなる応答を試みるのか、そしてその試みに際して何が起きているのかを探究する。Spivak は *Foe* の分析を終えようとするにあたって次のように述べている。

At first I had wanted to end with the following sentence: Mr. Foe is everyone's Foe, the enabling violator, for without him there is nothing to cite. A month after finishing with writing, I heard Derrida's paper on friendship. I want to say now that this *Foe*, in history, is the site where the line between friend and foe is undone. When one wants to be a friend to the other, it withdraws its graphematic space. Foe allows that story to be told. (Spivak 193-194)

今まで見てきたように、*Foe* や Susan は、Friday を理性的な言説の内に押し込むことで彼を捉えようとする存在であった。しかし、彼らの試みが無ければ Friday (そして Cruso) についての物語が書かれようとするこすらなかつたこともまた確かである。言葉を持たない他者を前にして彼らを書こうとするとき、その作家は必然的に彼らの友となり敵となる。*Foe* ではその過程が描かれていたのだ。

しかし、*Foe* においてはそれ以上のものが描かれている。それは、言葉を持たない他者を語る主体の場という問題である。死者となってもはや言葉を持たない Cruso、舌を奪われ、教育を受けなかつたために言葉を持たない Friday らを語ろうとするとき、その者に何が起こるのか。Susan の主体の場に注目することで、それが明らかになる。以降、この点について考察する。

## 2. 幽霊的な主体の場

*Foe* 第二章以降において、Susan は幽霊の例えを複数回用いている。従来の研究においてこの描写にはほとんど注意が向けられてこなかつたが、この描写に注目することで、本作における言葉を持たぬ他者を語るための主体の場について考察を進めることができるだろう。本節では、*Foe* における Susan の幽霊的な主体の場を分析する。

*Foe* の第二、三章では Susan が島での出来事を真実の言葉でもって語ろうと奮闘し、挫折するプロセスが描かれているということについては前節で述べた通りである。そのプロセスにおいて、彼女は自分が幽霊であるかのように感じていくことになる。彼女は *Foe* が留守にしている家に住み込み、彼に宛てて次のように書く。“We will disturb nothing.

When you return we will vanish like ghosts, without complaint” (64). また、“Days pass. Nothing changes. We hear no word from you, and the townsfolk pay us no more heed than if we were ghosts” とも書いている (87)。

島での出来事を物語ろうとするとき、自分は実体を失った幽霊であるという感覚が Susan を捉える。Foe の第一章は、Cruso の島での出来事について彼女が書き留めた手記という体裁を取っているのだが、それを自ら読み返しながら彼女は次のように書く。

“When I reflect on my story I seem to exist only as the one who came, the one who witnessed, the one who longed to be gone: a being without substance, a ghost beside the true body of Cruso. Is that the fate of all storytellers? Yet I was as much a body as Cruso” (51). 彼女は島での出来事を証言し、死んでしまった Cruso や言葉を持たない Friday を語ろうとする。しかし、そこにおいて彼女は自らが幽霊であるかのような感覚を覚えてしまう。上の引用にあるように、それは他者を語ろうと試みる話し手としての、作家としての宿命なのである。彼女は語るために、自らの実体を他者のために捧げなくてはならない。実体でありながら、実体を失ってしまったかのような場、このような場においてこそ、彼女は亡くなった Cruso と出会うことがあるのである。彼女は Foe に宛てて次のように書いている。

“You are alive and well, and as we march down the Bristol road I talk to you as if you were beside me, my familiar ghost, my companion. Cruso too. There are times when Cruso comes back to me, morose as ever he was in the old days (which I can bear)” (107). 彼女は実体の無い幽霊的な立場にあることで、今は亡き Cruso (そして不在の Foe) と対面することができる。このように、幽霊的な主体の場においてこそ、Susan が言葉を持たない他者と出会う可能性、彼らを語る可能性が開かれているのである。

しかし、先にも見たように、彼女は島の物語を語る主体の場を Foe に明け渡してしまうのである。彼女は Foe に次のように書く。

Return to me the substance I have lost, Mr Foe: that is my entreaty. For though my story gives the truth (I see that clearly, we need not pretend it is otherwise). To tell the truth in all its substance you must have quiet, and a comfortable chair away from all distraction, and a window to stare through; and then the knack of seeing waves when there are fields before your eyes, and of feeling the tropic sun when it is cold; and at your fingertips the words with which to capture the vision before it fades. I have none of these, while you have all. (52)

彼女は、真実には実体が備わっていないとは思ひ込み、彼女がそのような真実を書くことができないのは作家としての文才や環境が無いからであると思ひ込んでしまっているが故に、語る主体の場を作家 Foe に明け渡してしまう。彼女は Foe に次のように言う。“I was intended not to be the mother of my story, but to beget it. It is not I who am

the intended, but you” (126). そして Foe に書かれることによって、彼女は自身の失われた実体を取り戻そうとするのである。このことはすなわち、島での物語を語ろうと試みる中で彼女に訪れた自分が幽霊であるかのような感覚、幽霊的な主体の場を失うであろうことを意味する。そして、正にそのために証言は不可能となっていくのである。

ここまで見てきたように、Susan は自分が語ろうとする物語において幽霊化を経験する。しかし、彼女は (*Foe* という作品における) 現実世界においても幽霊に付き纏われることになる。第二章において Susan は、彼女と同じ名前を名乗り、彼女の娘であると自称する少女 (以下、Susan と区別するためにこの少女を少女 Susan と呼ぶ) と出会う。また、Susan の召使いであったという女性も現れる (このような設定から読者は *Roxana* を意識させられる)。Susan は彼女らの主張を認めず、Foe に次のように言う。“I say to myself that this child, who calls herself by my name, is a ghost, a substantial ghost, if such beings exist, who haunts me for reasons I cannot understand, and brings other ghosts in tow” (132). そして Susan は、Foe が彼女らに台詞を与え、彼女らは長い昔話でも始めるのだらうと言う (130)。このように、Susan は物語を抱えた幽霊に取り巻かれる。自らの実体を取り戻そうとしている Susan は、彼女らと自分を区別したがるのである。

Foe に語る主体を明け渡したとはいえ、先に述べたように彼女は自分の物語に嘘や島の外部の要素が盛り込まれることには耐えられず、抗議し続ける。彼女は Foe の中に島の物語をこしらえようとしているのであり、その意味で彼女は物語に対する所有権を手放そうとはしていない。つまり、彼女はまだ真実のみでもって言葉を持たない他者を語ろう (語らせよう) としているのであり、したがって彼女の幽霊化は続く。彼女は Foe に次のように言う。

In the beginning I thought I would tell you the story of the island and, being done with that, return to my former life. But now all my life grows to be story and there is nothing of my own left to me. I thought I was myself and this girl a creature from another order speaking words you made up for her. But now I am full of doubt. Nothing is left to me but doubt. I am doubt itself. Who is speaking me? Am I a phantom too? To what order do I belong? And you: who are you? (133)

彼女は自分の生活が物語と化してしまい、実体を失ってしまったと考えている。そしてその点では少女 Susan と何も変わらないのではないかと疑っている。彼女は幽霊化に耐えられない。故に、彼女はその場を投げ出してしまうのであった。Foe に書かれることによって自分の実体を取り戻そうとする過程において、彼女は幽霊的な主体の場を失わざるを得ない。そこにおいては、先に見たような他者と出会う可能性は失われてしまう。

彼女は第三章の最後において、少女 Susan について Foe に次のように言う。“No, she is



substantial, as my daughter is substantial and I am substantial; and you too are substantial, no less and no more than any of us. We are all alive, we are all substantial, we are all on the same world” (152). 彼女は、自分と彼女の娘と Foe と少女 Susan とを実体を備えた存在として同じカテゴリーに入れる。ここにおいて、前節で見たように、島での真実の物語が語られることはなくなる。上のように言う Susan に対して、Foe は “You have omitted Friday” と言う (152)。Foe はこのように発言するが、補足するならば彼女はこの発言において Cruso も除いているのである。ここにおいて、Susan らと Cruso や Friday が属している世界が異なっていることが仄めかされているのだ。つまり、Cruso や Friday が属する次元、幽霊化によってのみ辿り着く可能性を得られる場にこそ Cruso や Friday の物語、すなわち言葉を持たぬ他者を語る可能性が存在していることが示唆されているのである。その可能性は Susan が幽霊化から逃れようとする試みによって閉ざされてしまった。

しかし、そもそも Cruso や Friday の物語は表象不可能なものではなかっただろうか。Foe 第四章において、それまでとは異なる語り手である「私」が水中の Friday を訪れる。そこでは次のような描写がある。“But this is not a place of words. Each syllable, as it comes out, is caught and filled with water and diffused. This is a place where bodies are their own signs. It is the home of Friday” (157). つまり、言葉を持たない Friday と触れ合うことのできる場は、言葉とは別のところにあるのだ。そこでは言葉を発しようとする試みは全て水に妨げられてしまう。そこでは言葉を持たない他者の身体こそが彼らのしるしとなるのである。では、語り手である「私」とはどのような存在であるのか。Attwell は草稿研究を通して、Coetzee がここで自分自身をテキストに組み込もうとしていることを指摘している。Coetzee は 1983 年の 10 月に次のように記している。“The only hope for this book is if it moves to a climax. That is to say, it will have to justify itself at the end. . . . Which will entail a stripping away of all disguises, down to ME” (qtd. in Attwell 153). この意識のために、Defoe の時代という設定であるにもかかわらず、あるいはそれ故に、自己をテキストに組み込むことが Coetzee にとって重要になるのだ<sup>5</sup>。Coetzee はこう記している。“The only figure I can generate anything but puppetry out of is myself. When am I going to enter?” (qtd. in Attwell 153). そして、Coetzee の作家としての自意識が最もはっきり現れている場が、この場面における Friday なのである (154)。したがって、興味深いことに Attwell は次のように述べることになる。“Of course, it is not remotely the case that Friday represents Coetzee’s image of himself; it is rather that in Friday, in a willed, almost fatalistic way, Coetzee would confront his own limitations” (154). この指摘によれば、Coetzee は Friday において自身の限界と向き合うのである。ならば、Foe の第四章における「私」、Friday の身体に触れてその言葉を引き出そうと試みて失敗する「私」が誰であるのかという疑問への回答のひとつは、Coetzee の自意識であると言えよう<sup>6</sup>。このようにして、Coetzee はテキストに組み込まれた自己と、作家としての自意識との距離を測っているのである。更に、こ

の自意識と Friday の身体との接触は、語る主体の生と生物学的な生との不一致の場であると言える。この点については次節で検討する。

Coetzee は、*Foe* において死んだ Cruso や言葉を持たない Friday が物語に回収できない存在である様を描くことに成功した。しかし、このことは同時に次のことを意味する。すなわち、Coetzee は、*Foe* において物語ることの限界を描くことに成功してしまったようにも思われるのである。Susan や *Foe* の試みにおいては、彼ら言葉を持たない他者を描くことは不可能であった。では、言葉を持たない他者を語るためにはどうすれば良いのであろうか。その試みは不可能なのであろうか。しかし、語るができないということは、語るべきことが何も無いということの意味しないのである。ならば、いかにして語るのか。このように、言葉を持たない他者を語ることの不可能性に直面して初めて証言の可能性が幽霊化の経験として開かれるのであった。そして、Susan がそのような場を投げ出してしまったがために証言の可能性が閉ざされてしまったことを本節では確認してきたのである。このように、*Foe* においては証言が可能になる主体の場が幽霊的な主体の場であるということが描かれているのである。

このような主体の場の意義を確認するために、本節で確認したことと証言における主体の場を比較することは有益であろう。次節では、ジョルジョ・アガンベン (1942-) が『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』(邦訳 2001) で分析した、証言を行う者の主体の場について考察する。

### 3. 証言における脱主体化

本節では、証言をする者の主体の場を、アガンベンの議論に沿って確認する。その後、証言の主体の場と Susan の幽霊的な主体の場とを比較することで、*Foe* における幽霊の描写の意義を確認することができ、更には Coetzee のその他の作品群と関連付けることができるだろう。

アガンベンは、言語を行使する者の主体性の原初的構造を分析する。アガンベンはキーツがジョン・ウッドハウスに送った手紙を引用しているが、その中では詩人の主体が常に疎外と不在の内にあることが述べられている<sup>7</sup>。そしてアガンベンは次のように言う。「詩的創造の行為が、いやおそらく言葉を発するといういかなる行為も、脱主体化のようなものをもなっているということは、わたしたちの文学的伝統の共有財産である(「ミューズ」というのが、昔から詩人たちがこの脱主体化に与えてきた名前である)」(153)。

この脱主体化について、アガンベンはバンヴェニストを援用しながら考察を進める<sup>8</sup>。主体性というものは、言語を行使することによって獲得されるのである。アガンベンが述べているように、「一般に、人間は、言述行為〔話〕を世界のうちに挿入することをおして言表の行為を実行することによってしか、すなわち、「わたし」、「いま」と言うこ

とによってしか、〈いま〉を生きるすべをもっていない」のだ(165-166)。それ故、主体は言表行為が始まると同時に生まれ、言表行為が終わると同時に崩れ去る。主体と言表行為のこのような関係から、アガンベンは次のように述べることができる。「言表の行為において、「わたし」と言うことにおいて、自己自身のもとへと自らを絶対的に現前させた生物学的な生を生きている存在は、自分の生きたもろもろのことがらを底なしの過去へと追いやり、それらのことがらと直線的に一致することはもはやできない」(166)。その有り様を、アガンベンは次のように描写する。「言表する声の内密の意識において実現される特別な現前を享受してしまった者は、リルケが動物のまなざしのうちに発見した開けひろげられたものへの損なわれることのない密着を永遠に失い、いまや眼を内面へと転じて、言語活動の非-場所に向ける」(166-167)。ここで確認してきた主体と言表行為との関係についての結論は、当然次のようなものとなるだろう。すなわち、「そこでは、生物学的な生を生きている存在と言葉を話す存在、主体化と脱主体化は、けっして一致することができない」のである(175)。

しかし、この非一致の場こそが証言の場でありうるのだ。そのことをアガンベンは次のように説明している。

生物学的な生を生きている存在と言語活動のあいだに結合がないのであれば、自我がこの隔たりのうちに宙づりになっているのであれば、そのときには証言は存在することができる。わたしたちの自己自身との非一致をあらわにする内密性こそが、証言の場所である。証言は、結合の非-場所において生起する (*la luogo* [場所をもつ])。声の非-場所には、エクリチュールではなくて、証言があるのである。(176)

このようにして、語る主体の生と生物学的な生との不一致の場において証言が可能になることをアガンベンは検討していく。ここで分析された脱主体化の場は、Susan が経験した幽霊化の場とかなり性質が近いと考えられる。Susan もまた、島での出来事を証言しようと試みの中で、彼女自身の実体が失われてしまったかのように感じたのであった。この経験はすなわち、生物学的な生を生きている存在と言語活動との間に生じた非結合の経験なのである。その非結合においてこそ証言は存在することができるのだ。しかし、Susan は自身の脱主体化の場を投げ出してしまったが故に、島での出来事を語るができなかったのである。そして、この点については、証言の主体について考察を進めることでより深い理解が得られる。アガンベンは、生き残って証言する者、または「ゴルゴンを見た」が故に、語るべきことを持っているが話すことのできない者、そのどちらが証言の主体なのだろうかかと問うて次のように述べている。

一見したところでは、人間が、生き残った者が、非-人間について、回教徒につい

て証言していると見えるかもしれない。しかし、生き残った者が証言するのは、回教徒のためにである——専門的な意味で「代わりに」あるいは「代理として」である（「わたしたちは、かれらの代わりに、代理として語っているのである」）——とすれば、代理を委託された者の行為は代理を委託する者に帰属するという法律の原理にしたがって、回教徒こそが証言していることになる。しかし、このことが意味するのは、人間のもとで本当に証言している者は非-人間であるということ、すなわち、人間は、非-人間の受託者にほかならず、非-人間に声を貸し与える者であるということである。あるいはむしろ、証言の所有主はいないということであり、話すということ、証言するということは、あるものは底まで行って、完全に脱主体化し、声を失ってしまい、あるものは主体化して、語るべきものは——身をもって体験したこととしては——なにもないにもかかわらず話す（「身をもって体験せずに傍らから見たことについての話」という、めまぐるしい運動に入ることを意味するということである。すなわち、そこでは、言葉をもたない者が話す者に話させているのであり、話す者はその自分の言葉そのもののなかに話すことの不可能性を持ち運んでくるのである。こうして言葉をもたない者と話す者、非-人間と人間は——証言において——、無差別の地帯に入りこむ。そして、その地帯では主体の位置を割り当てることは不可能なのであり、自我という「夢想された実体」、またそれとともに真の証人をつきとめることは不可能なのである。（163-164）

つまり、一見証言を行う者こそが証言の主体であるように思われるのだが、「代理として語る」ことの意味、それが法において持ちうる意味を考えると、証言の場における証言の主体とは、証言される者であると考えられるのである。もしくは、ここにおいて証言の所有主は存在しない。そのような証言の場において、証言する者と証言される者とは区別することができないということになる（このようなある種の混合が *Foe* 以降の *Coetzee* にとって重要なテーマとなってくることについて、後に触れる）。

このことに加えてアガンベンは、証言においては主体の空虚な場所が決定的な問題であると指摘して次のように述べる。

証言とは、あるひとつの潜在する能力が語ることの無能力をとおして現勢化することであり、同時にまた、あるひとつの不可能性が話すことの可能性をとおして現存にもたらされることである。この二つの運動は、単一の主体、あるいは単一の意識のもとに一体化させることができず、交流不可能な二つの実体に分離することができない。この分離不可能な親密性が証言である。（197）

つまり、証言する者は他者の経験について語るという不可能性を背負わざるをえないの

であるが、その不可能性と同時に証言することの可能性がもたらされるのである。そしてそのとき、証言する者と証言される者とは分離することができない。その場こそが証言の場の特徴なのである。そして、アガンベンは「証人の権威は、語るができないということの名においてのみ語るができることにあり、つまりは主体であることにある」と述べている (213)。ならば、語ることの不可能性においてはじめて語る可能性が開かれるのであり、その場とはすなわち脱主体化の主体化という場であると言える。

このような証言の場こそが、Susan が得られなかったものなのである。前節で確認したように、彼女は脱主体化の経験において不在の者と出会うことができた。そして、島での出来事を書こうとする試みの中で、自身の主体が失われる感覚を覚えた。すなわち、先にも指摘したように、彼女は島での出来事について証言しようとする過程においてこの脱主体化を経験していたのである。しかし、彼女はこの点で踏みとどまってしまっていた。言い換えれば、彼女は脱主体化の主体化という場に辿り着けなかったのである。

ここまでの私の主張は、アガンベンが分析したような証言の場と、Coetzee が *Foe* において描いた幽霊的な主体の場が同じ構造を持っているというものである。では、このことは何を意味しているのだろうか。アガンベンの議論は、アウシュヴィッツについて証言することの不可能性や、証言が不可避免的に伴う欠落について検討することから始まった (40-42)。そして、ここまで見てきたように、脱主体化の主体化という経験を伴う場、証言する者とされる者が不分明になるような場においてこそ証言は可能となるのであった。本論の *Foe* についての議論も、言葉を持たない他者を語ろうとする者が不可避免的に彼らの友であるというだけでなく同時に敵となりうるという点から始まった。そして、言葉を持たない他者を語ることの不可能性に直面し、それでもなお彼らについて語ろうとするとき、その者に幽霊化という経験が訪れるということを分析してきた。このことは、Coetzee が言葉を持たない他者について語ることの不可能性を真正面から受け止めており、それだけでなく、その不可能性の前に屈するのでなく、その不可能性を認識してなお彼らを語ろうとするときに、その者の主体に何が起こるのかということを深く分析しているということを明らかにしていると言えよう。

最後に、本論で述べたようなテーマが以降の Coetzee 作品においてどのような意味を持っているのか、彼の作品群の中で *Foe* をどのように位置付けるべきかについて考察する。ここでは、他者の表象の差異に注目する。*Waiting for the Barbarians* (1980) において、行政長官にとっての特異な他者として描かれている夷狄の少女は、言葉を持った存在として描かれている。行政長官は帝国内で懇ろに世話をしていた少女を夷狄の人々へ引き渡すとき、彼女に “Tell them why we are here. Tell them your story. Tell them the truth” というのである (77)。つまり、本作において夷狄の少女は自らの真実の物語を語るができる存在として描かれているのである。この点に関しては *Life and Times of Michael K* (1983) においても同様である。第二章の語り手である医者 K に次のように言う。 “Tell

us the truth, tell us the whole truth, and you can go back to bed, we don't bother you any more” (138). 行政長官や医者は、このようにして他者に真実を話させることで彼らの物語を守ろうと試みる存在である（無論、権力の側に立つ彼らの態度は常に暴力性と背中合わせである）。しかし、ここで注目すべきは、他者が自ら語ることができる存在として描かれているという点である<sup>9</sup>。他者に語らせようと試みる行政長官や医者には、本論で論じたような脱主体化の経験は訪れないのである。*Foe* 以降において、他者は言葉を持たない存在として描かれることになる。*The Master of Petersburg* (1994) の Dostoevsky にとっては自殺した息子 Pavel がそれに該当し、*The Lives of Animals* (1999) の Elizabeth の講演においては、虐殺されたユダヤ人や動物がそれに該当する。そして、他者が言葉を持たないとき、証言はその欠落、不可能性を明らかにする。しかし、アガンベンが述べるように、「このことは証言の価値を決定的に変え、証言というものの意味を思いがけない領域に探しにいくことを強いる」のである（アガンベン 42）。

*Foe* において描かれていたような脱主体化の場は、いわば偶然 Susan に訪れたものであった。そして彼女はその経験の意味を理解できなかった。では、言葉を持たない他者を語ろうとする者は、その可能性を恩寵のように待ち続けるしか策を持たないのであるか。そうではない。そのような主体の場を意図的に得ようと試みるのが、Coetzee の「共感的想像力」なのである。*The Lives of Animals* において、Elizabeth は “The heart is the seat of a faculty, sympathy, that allows us to share at times the being of another” と述べる (34)。そして、Coetzee 自身が *The Good Story* (2015) においてほとんど同種の発言をしている。彼は “Sympathetic identifications allow us to enter other lives and to live them from the inside” と述べるのだ (134)。このように、Coetzee の共感的想像力においては他者の生の中に入り、その生を生きることが第一の特徴なのである。そして、共感的想像力を行使する主体は脱主体化的な経験をするのである<sup>10</sup>。これが Coetzee にとって言葉を持たない他者に応答するための倫理的態度となる。従来の研究においては、Coetzee の共感的想像力について述べられるとき、それが直接提唱された *The Lives of Animals* や同時期に発表された *Disgrace* (1999) と関連付けられることがほとんどであった。しかし、そのようなモチーフは 1999 年頃初めて現れたものではない。本論で明らかにしたように、*Foe* において初めてこのような主体の場が描かれていたのであった。

## 註

<sup>1</sup> Friday のこのような表象に関して、Derek Attridge は次のような指摘をしている。Friday に言葉を与えた所で、彼は自らの言葉を聞いてもらうために英語を選択せざるをえず、彼の言葉が聞かれるとしても、それは周縁化された方言として聞かれるということになるのである (Attridge 86)。そのような選択は、アパルトヘイト期に不可避免的に支配的なグループの一員として過ご

した Coetzee にとっては安易に選ぶことのできないものである (86)。ならば、抑圧を加える側の人間が、確実な変化を起こすために取ることのできる役割とはどのようなものか。それは Foe のように Friday に言葉を教えようとするのではなく、“authorship, empowerment, validation, and silencing” の過程を、それに内在する問題を常に意識しながら描き、読者にもそれを意識させることなのである (86-87)。また、David Attwell による Coetzee の草稿研究により、Coetzee が Foe の創作段階で Friday に語らせ、Susan と互いに言語を教え合うという構想を描いていたことが明らかになった (Attwell 155)。しかし、Coetzee が描きたかった世界は、ポストコロニアリズム的な観点から単に Friday に語らせるというものではなかったのである (155-160)。Friday に言葉を与えなかったことで、Coetzee は植民地主義の暴力のアレゴリーをテキストに組み込んでいるとして評価された。しかし、Coetzee のこの選択は南アフリカの植民地独立後のナショナリズムの失敗への批判でもあるのだ。この点については Attwell を参照 (157)。

- 2 このようにして Susan は Foe の作家としての権威に反抗するのである。Lucy Graham が指摘しているように、(De) Foe のように力のある立場ではなく、Susan が位置しているような弱者の立場からこそ権威を問い直すことができるのである (Graham 221)。そして、男性である Coetzee が女性である Susan の声を通してそのような問い直しを行うことができるということが、フィクションやストーリーテリングに特有のテキスト戦略なのであると Graham は指摘する (231)。
- 3 上の引用で Susan は、Foe ならば Friday は Friday なのだと答えるだろうと述べているが、中井 亜佐子が指摘しているように、“Friday” とは Defoe が描く Crusoe が Friday に与えた英単語の一つに過ぎず、したがって「フライデイはフライデイですらない」のだ (中井 33)。
- 4 Susan は第二章において、Foe が書き記した複数の物語に対してそれらは嘘でもって謎めかしたようなものであるだろうと書いていた (50)。
- 5 テキストと作家としての自己自身との距離についての考察が、同時期に構想されていた自伝的作品についての考察と深く結びついていることは注目に値する。この点については Attwell を参照 (Attwell 152-153)。また、自己をテキストに書き込む試みとして、Coetzee は自身のイニシャルを作中に紛れ込ませている。Susan は Foe の家にあるトランクから、“M. J.” というイニシャルのあるボンネットを見つけ出す (Foe 93)。
- 6 あり得る選択肢は、Attridge が挙げているように、“Susan Barton, Daniel Foe, Daniel Defoe, J. M. Coetzee, our own” である (Attridge 67)。
- 7 その手紙には次の一節が含まれている。「詩人は、存在するもののなかでもっとも詩的でないのである。というのも、かれは同一性をもたず——つねにほかのからだの代理をしていなければならない——ほかのからだを満たしているからである」(アガンベン 151)。
- 8 アガンベンはパンヴェニストの次の言葉を引用している。「話し手が自分を主体〔主辞〕として言表するのは、わたしがその話し手を指している現におこなわれている話〔言述行為〕にお

いてである。それゆえ、主体性の根拠が言語の行使にあるというのは、文字通り真実なのである。」(アガンベン 165)。

- <sup>9</sup> このように述べる時、私は Spivak が提示した問題を見逃しているのではない。Spivak が述べているように、夷狄の少女や K が物語を残したとして、それを何年も後になってから誰かがアカデミックな制度の中で解読したとしても、そのことは彼らが「語るができる」ということを意味するのではないのだ (Spivak 309)。私がここで問題にしているのは、夷狄の少女や K がごく単純な意味で自らの言葉を持っているという点である。
- <sup>10</sup> Coetzee の共感的想像力を行使する主体の場については、ほとんど研究がなされていない。しかし、Sam Durrant の “J. M. Coetzee, Elizabeth Costello, and the Limits of the Sympathetic Imagination” がこの分野において非常に有益な視点を提供してくれる。

## 参考文献

- Attridge, Derek. J. M. *Coetzee and the Ethics of Reading: Literature in the Event*. Chicago: The University of Chicago Press, 2004.
- Attwell, David. J. M. *Coetzee and the Life of Writing*. Oxford: Oxford University Press, 2015.
- Coetzee, J. M. *Foe*. 1986. London: Penguin, 2010.
- . *Life and Times of Michael K*. 1983. New York: Penguin, 1985.
- . *The Lives of Animals*. Ed. Amy Gutmann. Princeton: Princeton University Press, 1999.
- . *Waiting for the Barbarians*. 1980. London: Vintage, 2004.
- Coetzee, J. M., and Arabella Kurtz. *The Good Story: Exchanges on Truth, Fiction and Psychotherapy*. London: Harvill Secker, 2015.
- Durrant, Sam. “J. M. Coetzee, Elizabeth Costello, and the Limits of the Sympathetic Imagination.” *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*. Ed. Jane Poyner. Athens: Ohio University Press, 2006. 118-134.
- Graham, Lucy. “Textual Transvestism.” *J. M. Coetzee and the Idea of the Public Intellectual*. Ed. Jane Poyner. Athens: Ohio University Press, 2006. 217-235.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge: Harvard University Press, 1999.
- アガンベン、ジョルジョ『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』上村忠男、廣石正和訳、東京、月曜社、2001。
- 中井亜佐子『他者の自伝—ポストコロニアル文学を読む』東京、研究社、2007。